

柳田國男 著

葬送習俗語彙

国書刊行会

「分類民俗語彙」の復刊にあたって

本年は、日本民俗学の祖・柳田國男の生誕一〇〇年にあたり、内外の学者を集めた国際シンポジウムが開かれた。これを期に、民俗学はさらに広い視野と質を伴った発展期を迎えようとしている。

昭和十年は、民俗学にとって記念すべき年であった。柳田國男の還暦祝を境として全国に民俗学の研究が澎湃としておこり、雑誌「民間伝承」が発刊され、地方では各地に民俗研究の同志が集まり、調査研究の報告をのせた、謄写版などの小冊子が刊行されるなど、幅広い研究活動が展開された。

今回復刻する「分類民俗語彙」一二冊は、いずれも昭和十年から約一〇年の間に刊行されたものであり、多くの研究者たちに利用されとともに、それはまさに、民俗採集に伴う研究の進展を示すものであった。

この「分類民俗語彙」は、柳田國男が民俗資料を採集する上で取った方法で、ことばが、過去の日本人の生活の痕をとどめていることに着眼し、ことばを蒐集することにより、日本人の過去の生活、文化、風習等を探り、それを基に、民俗を分類整理しようとしたものである。

発刊当時、柳田國男は、日々の生活に過去の習俗を窺い見ることが不可能になってゆくことを憂慮した。今日それらの危惧は、まさに現実となって表われている。この一二冊の書は、失われた習俗を現在に伝える貴重な資料にとどまらず、柳田民俗学の精髓に迫る基本的な名著でもある。

この「分類民俗語彙」一二冊を再び世に問えることは、心からの喜びであり、同時にこれらの書が、今後の研究における糧となって活用されることを確信し、また新しい民俗語彙集への礎となれば幸いである。

序

數多い諸國の方言集の中でも、葬禮に關する用語の採録せられたものは至つて少ない。やはり平生之を口にする者が無いので、かゝつて調べようとする人でないと、知ることが出來ぬのかと思ふ。郡誌の風俗の部には、折々葬列の様子などを詳しく記したのもあるが、是にもその前後の家々で守つて居る慣例を、注意したものが一向に見當らず、現に所謂兩墓制の如く都市と農村と、新開地と舊來の居住地との間に存する、最も顯著なる制度の差異が、近頃になつて漸く我々の仲間の問題として、考へられ始めたものも多いのである。中代以前にあつてあれほど大切であつた喪屋の生活、火と食物の上に嚴存した忌の拘束、是と各自の經濟的要求との相關、現在は殆ど常識の如くなつて居る墓地點定の個人主義が、行く／＼此國土を石碑だらけにしてしまはないかどうかの疑問等、一つとして今日明になつて居る歴史知識といふものは無いのである。それよ

りももつと根本的なものは、死後に關する我々常人の考へ方、今はこの世に住まぬ國民と、その血を受け繼いで居る活きた人々との連鎖、永い久しい血食といふ東洋思想は、果して變化改廢無しに今も續いて居るか、或は既に凡俗の間にすらも、消えて痕無くならうとして居るのであるか。斯ういふ痛切なる社會の問題までが、たつた一つの我々の方法によつて、僅かに解答を將來に期し得るのである。故に現在の資料はまだ決して豊富ではないけれども、寧ろ調査者の興味を刺戟せんが爲に、この程度に於て一應の整理を試みる。幸ひなことには他の色々の習俗とちがつて、葬儀はその肝要な部分が甚だしく保守的である。喪家が直接に其事務に當らず、之を近鄰知友に委托する爲に、後者は専ら衆議と先例に依つて、思ひ切つた改定を加へようとしなからである。其結果は村と村との間に著しい仕來りの違ひがあると共に、意外な遠方の土地にも爭ふべからざる一致があつて、或はこの特色によつて、土着の新舊を想察せしめる場合さへあるかと思はれる。西人謂ふ所のフオクロリズム、即ち進化段階の

比較と綜合とが、最も力を施し易い領域であり、この實驗の收穫は必ずしも一個葬送習俗の沿革を明かにするに止まらず、更に他の幾つかの複雑なる問題に應用することも出来るかと思ふ。今回の編輯も前の婚姻語彙のやうに、大間知篤三君が主として其勞に任ぜられたが、是に用ゐられた資料の大部分は、自分の十年以來の集積であつた。曾てこの約五分の一を、宗教研究といふ雜誌に掲載したことがあるが、我々の趣旨と方法とを、尊重する者が少ないので繼續しなかつた。日本の宗教研究なども、斯ういふ國內の事實の認識を、せめては外國學者の所説と同一程度に、重んずるやうになつたらよからうと思ふのだが、其機運を作るだけの力が、私たちの仲間至今まではまだ備はらなかつた。是が永遠の國の學問の姿ではなくて、たゞ單なる一過渡期の状態に過ぎなかつたことを、やがては立證する日の到來せんことを希ふの他は無いのである。

昭和十二年八月

柳田國男識

本書の編輯と出版に就いては、
財團法人啓明會の補助を得た。

銘記して感謝の意を表する。

引 用 書 名 略 字 表

(郷)	雜誌「郷土研究」
(民)	同「民族」
(民學)	同「民俗學」
(民歷)	同「民族と歴史」
(民傳)	同「民間傳承」
(民事)	昭和七年白東社版「日本民事慣例類集」
(人)	雜誌「東京人類學雜誌」及び「人類學雜誌」
(風)	同「風俗畫報」
(旅)	同「旅と傳説」
(葬號)	同誌第六卷七號「誕生と葬禮號」
(盆號)	同誌第七卷七號「盆行事號」
(食號)	同誌第九卷一號「食制研究號」
(郡誌)	(町史)、(村誌)等は、其本文中の郡名、町名、村名を省略したるものである。

葬送習俗語彙目次

序	文	一
---	---	---

(引用書名略字表)	一〇
-----------	----

一、喪の始め	一
二、葬式の總名	四
三、二人使ひ	八
四、寺行	一三
五、枕飯	一七
六、ひがはり	二〇
七、年たがへ	二六
八、外かまど	四三
九、忌の飯	五一

一〇、葬	具	六〇
一一、入	棺	六六
一二、出立ちの膳		六〇
一三、假	門	六六
一四、野邊送り		六〇
一五、棺	舁	一二三
一六、野普請役		一二六
一七、墓	葬	一三三
一八、火	葬	一三〇
一九、野がへり		一三四
二〇、墓じるし		一三七
二一、墓地の種類		一四四
二二、朝参り夕参り		一五五
二三、喪屋・靈屋		一六二
二四、釘念	佛	一六六

二五、願もどし	一七〇
二六、水かけ着物	一七三
二七、荒火あけ	一七七
二八、佛おろし	一八五
二九、忌中と忌明け	一八七
三〇、てまどし	一九六
三一、佛の正月	一九八
三二、新盆	二〇一
三三、月忌年忌	二〇三
三四、問ひきり	二〇六
三五、所屬未定	二一〇
索引	二二三

一、喪の始め

死者の肉親が、いつから喪に入るかはまだ明かになつて居ない。一旦呼吸が切れてもそれだけではまだ死んだとは解し得られないからである。醫者の宣告があつても、妻や兒はまだ名を呼ばずに居られない。實際壯年や少年には、氣が絶えて又吹返す例もあつた。しかし其試みとは別に是非とも魂呼ばひをしたのは儀式である。支那で「哀を發する」といふなども、やはり亦全く事きたと思つた後に、若干の期間があつたことを推測せしめる。恐らく是とはよく似た儀式を必要として居たのであらう。日本でも其時間が追々と短くなつたらしい形跡がある。

モトツケル 此語義はまだ不明だが、肥前島原あたりには行はれて居る（葬號）。病人斷末魔に近づくとき、彼と一番近い者、親ならば子、夫であつたら妻が、大きな聲で其名を喚ぶ、それをモトツケルと謂ふさうである。

コエヲカケル 對馬では單に聲を掛けると謂ふのであるが、此風は弘く行はれて居る。但し

阿連部落では、死に切つて了つてから近親が「あの世に行かにやらんから、此世にうろつくな、あと／＼が榮えるやうに祈つて居れ」など言ふ。六十歳以上で死ぬことをオイヤミと稱し、そんな場合は聲を掛けることなどはあまりしない。此所では死水といふことはしないさうである。

ヒトヨビ 伊豫喜多郡大川村では是を人呼びと謂ひ、急死者の出た場合等にするらしい。近所の男が屋根の棟に登つて、誰殿よ戻らしやれよと大聲で喚ぶ。三途の川を渡らぬうちなら戻ることがあるものと信じて居る（郷、四ノ四九三頁）。尙同地方では、失せ人の場合にも人呼びをする。

マスウチ 會津地方では人が死にかゝつた時、其家の屋根棟に登つて一斗櫛を伏せ、棒切れなどを以て敲く。是を櫛打ちと名けて魂の抜け去るのを抑へ、元へ戻す意味だと謂つて居るが、多くの場合は死の豫告である爲に、其音は哀れに聽えるといふ（郷、七ノ三號）。櫛の底を敲く呪は子供などが神隠しに遭つた場合、是を捜しまはる者が行ふ地方もある。是にもやはり近親の者が敲くを例とする。或は又當人の日頃用ゐて居た食器を、箸で叩いてあるく處もあるから、櫛もやはり人間の魂を此世に繋ぐ食物の力から導かれて居るらしいのである。魂喚ばひの行はれる必要は、或はそれが一旦元の體から離れて、尙その近くにさまようて居る

時刻の方が一段と適切であつたらうと思はれる。斯うして病室より外で柩を敲くなども、去り行く魂を喚び返す方法としか思はれぬのだが、後にはまだ片息のあるうちからは是をする様になつて、柩で抑へるといふ説明も生じたものらしい。自分などの生地播磨中部でも、末期に先だつて庭前の松樹の梢へ、提灯をともし登り、おうい／＼とわめく風があつたが、是を何と謂つたかは記憶して居ない。東京から西に見える武相の山地では、定まつた岡の上に登つて魂を喚び、そこを呼はり山といふとの話も聞いたことがある。他の地方の類例は數多く集めて見なければならぬが、元は事きれときまつて後に、尙一應はこの式を踐んだのではないかと思ふ。因みに本居先生の玉勝間卷十に此問題が説いてあるのは参考すべきものである。野府記萬壽二年八月七日の條に、尙侍嬉子隠れたまひて後三日目に、陰陽師恒盛外一人がその屋上に昇つて魂呼をしたことを叙し、「近代不聞事也」と附記して居る。公家の日記類を注意したら、上流の古い慣行は此他にも尙見つかることと思ふ。

ヤムラノカハ 肥前の五島崎山村上郷にかういふ名稱の井戸があり、底に石を敷き、周圍も石で築き、他の井戸とは趣を異にして居り、上下兩郷の人々は臨終に此の水を好む俗がある（五島民俗圖誌）。

二、葬式の總名

人の凶事の始から終り迄を、一括した名前はまだ知られて居ない。古い日本語でもそといふ語以外に、何か有つたかどうか私には明かでない。現在の用語も地方毎に區々であるが、大抵は其中の最も主要なる作法即ち家から葬地までの行列の名を以て、全體を覆ふことにして居る。ジャンボンとかジンカンとか又ガンモモとか謂ふのは、殊に印象の深い樂器の音であつて、多分は小兒の語を隱語のやうに採用したものだと思ふが、土地によつては是より外の正常の名の無い處もある。平生思ひ語なるが故に屢々傳承が絶えたものかと思はれる。東京などのオトムラヒといふ語は、よく考へて見るとやはり一種の忌詞らしい。トムラフといふのは葬後の供養のことなのだが、今では是を行列とも、又葬式の全部とも解して居るのである。トリオキといふ語は處理もしくは後始末といふ意味だから、總稱として似つかはしい語であるが、近畿中國では之を法師の引導の意味に、四國の一部では所謂湯灌の意味に、却つて之を定限して使つて居る。或はわざと用語の精確を避けようとしたのではないかと考へる。

トリシマヒ このトリオキと同じ意味の語が常陸多賀郡の山間部などで、葬禮名稱として使はれて居る。但し主として自家の葬儀を謂ふ場合に用ゐて居るらしい。

トヒオクリ 東京のオトムラヒに近い名稱は、隣接地域にはあまりなくて、薩摩の下甕島の一隅にトヒオクリといふ名がある。但しこれも今は老人たちの間にのみ知られて居るといふ（葬號）。隱岐でもトリオクリと謂ふ語を葬送の意味に使つて居る。單にオクリといふ語を葬送の意味に用ゐると、もう其語は他には使へなくなる。其不便を避ける爲に限定辭を冠せたので、或はトムラヒの方も元はトムラヒ送りと謂つたのかも知れぬ。

ノオクリ 單に送りと謂つて居る土地も無いわけでは無いが（小豆島方言など）、普通には野邊送り、又は野送りといふ語が弘く行はれ、又比較的古かつたやうである。

タチバ 此語は中國地方で弘く葬式の出立ちを意味して居るが、石見の安濃、邇摩、那賀の諸郡でも、また長門大津郡の一部でも葬式の事を立ち場と謂つて居る。

ミカクシ 身隠しはことによると以前の總名だつたかとも思ふが、現在は稍限られたる場合にしか使はれて居ない。たとへば海で死んだ亡者が明るみに在ることを厭ひ、磯に投げ出されて人に氣づかれずに居る場合に、夢などに現はれて身隠しをしてくれと頼むことがあると長門の島々では謂つて居る（島、一ノ三號）。又信州南端の或山村では、村の祭禮に臨んで死人

があるとき、それを内密に葬つて置くことだけを身隠しと謂ひ（山と民族）、遠江の磐田郡でも、本葬なしに埋むることをミガクシと呼んで農繁期の死人に之を行ふことがある（土の色、一二ノ三號）。なほ紙冠をミカクシと謂ふことは後に述べる。

カゲカクシ 矢張り遠州の阿多古の山村では、密葬もしくは假埋葬だけを影隠しと謂つて居る。爪とか頭髮とかを残し留めて置いて、本葬の折には是を棺に入れて送るさうである（能田太郎氏）。伊勢飯南郡邊りでも矢張り假埋葬を影隠しと呼んで居る。

チリヤキ 駿河志太郎では野邊送りをチリヤキといふ名がある（内田武志氏）。其語の起りは今は全く考へ出せない。他の類似の例の集まつて來るのを待つて居る他は無い。

タタキダシ 信州の埴科郡（民學、三ノ一號）、又更級郡の一部には斯んな語も有る（方言集）。敵くと云ふのは葬列の樂器か。或は又特にこの様な憎々しい名を用ゐる必要があつたのかも知れぬ。上水内郡では葬式の事であるが、惡口のために使ふ語となつて居る。

カラダメシ 阿波三好郡三野村芝生のことである。中以上の家では、屍體は葬儀以前に親戚二三名で墓地へ送つて埋葬しておき、其後に空虚の奥に僧侶前導して葬列を作りて磧又は野原に送り、會衆一同参列して讀經をすませる。それから火藥で葬具に火を移し燒盡す習慣があり、之をカラダメシと謂ふ（郡誌）。何故にかゝる方法が必要なのか、判然したことは言へ

ない。

クニガへ なほ此序に死者を意味する色々の隠語を集めて見るのも参考にならうと思ふ。此語は以前大阪の周囲などに行はれて居た（東成郡誌）。仙臺でも古く都参りといふのが葬禮のことであつた（方言以呂波寄）。伊豫の今治では「廣島へ煙草買ひに行つた」とか、又は大阪へ何とかしに行つたとかいふのが、死亡を意味する隠語であつた。

オヒマク 紀州の東牟婁郡では、人の死んだことを笈巻くと謂つて居る（縣方言集）。笈は旅人の用具で之を巻くとは出立を意味する。熊野は夙くから、山伏の死ぬことを、金になるなどいふ忌詞のあつた土地である。